特102
825

佛教摩觸療法

龔眞哉居士著

[illegible]大棒老師題字

始

特102
825

余は在米中彼地に渡られたる臨濟宗大本山鎌倉圓覺寺管長釋宗演老大師帝大教授鈴木大拙老居士及両忘庵釋宗活老大師につき歸國後は廣島縣佛通寺派大本山前管長香川寛量老大師現管長圓山雪庭老大師及萩野拙叟老大師等尚ほ京都紫野大德寺管長宗般老大師西ノ宮海清寺住職南天棒老大師を師として佛理を究めたり

病原とは如何吾々崇拜せる故原坦山老大師著禪學心性實驗論に曰く病理を論ずるは醫學の專門なれ

ど從來の醫の所謂病原こは眞の病原に非らずして其病の發生を促す可き病緣たるに過ぎざるを奈何せん今其れ眞の病原を究めんと欲せは單に生理學物理學等形而下の自然科學をのみ基礎とせす哲學心理學等形而上にも依らざる可からず

偉大なるかな故原坦山老大師は禪學心性實驗論を殘して幽冥界に入れり而して余は能く之を完うせり

緒言

太古に電光を奪取して電燈と爲し之を戸毎に点じ又一條の銅線に電力を用ゐ千万里外に安否を問酬するとを得べしと説く者あらば當時の人之を聞て妄談と爲し魔術として唯一笑に附せむ然れども今時の人は之を見聞し更に怪まざるは何ぞや畢竟是れ人智の開未開に由ればなり

今や人智大に啓け上は天文より下は地理に至るまで凡百の科學技藝發達し往時の不思儀界を打破し一として明瞭ならざる事なきに至れり之れ文化の賜にあらずや然らば現今の文化は既に其頂点に達したるものとして此以上究理發明する事なきやと云ふに否、決して然ら

ず刻下の文化は尚ほ其途中にあるとは何人も否定する者あらざるべし熟々現世界の狀態を大觀するに其究理發明は多く形而下に止まりて形而上に及べるもの少し是れ世界文化の一大缺点と云はざるべからず茲に出格の人ありて靈界未曾有の事を發明せりとせば世上或は妄誕虛說と視し却て其人を罵詈嘲笑せずとも限られず若し恁麼の事あらば开は太古人が電燈電信の事を聞て一笑に附せると何ぞ異ならんや　余不肖ながら多年佛敎研究の結果世の鍼灸藥餌を用ゐずして病者を救濟する事を發明せり自ら之を名けて佛敎身心療法と稱す發明以來之を万人に試むるに其効驗甚た著しきを覺ふ依て今本法の大要を記し世に公開する事とせり詳細の点は悉く載する能はずと雖

も本書を通讀翫味せば或は其要を了得するを得ん唯畏る世人一讀下に嘲笑唾棄せんとを語に云く人笑我々亦笑人と翼くは本書を會得し之を實地に試みて而して後批評を下さんとを

大正四年

口述者　眞哉居士識

佛教摩觸療法目次

第一章……序説
第二章……疾病の原因
第三章……病とは何ぞ
第四章……心機一轉
第五章……摩觸療法の由來
第六章……一喝と對治法
第七章……血液と摩觸療法
第八章……信仰心と療法の關係
第九章……暗示法の妙諦
第十章……氣海丹田
第十一章……一切唯心造
第十二章……結論

佛教摩觸療法

眞哉居士口述　某甲筆受

第一章　序説

人類は何れより出現せしぞと問はゞ一般の人は母の胎内より生れしものなりと答ふるで有ふ然らば母胎に宿る以前は何れにありしかと詰問せば蓋し答ふる者は甚だ稀なるべし元來人は父の白滴を因とし母の赤滴を緣とし此因緣相和合し以て形體を成すと雖も赤白の二滴本是れ空にして心意識智たゞ壽命を繫ぐまでの事じや尅實すれば人に人たるの實體はない只是れ空華幻影であるから一も捕捉すべきも

のはない然も恁麼なりと雖も凡俗は誤つて此空華幻影を實體ありと認め虚りに我執を起し煩悶顛倒す之を名けて愚鈍の凡夫と云ふ若し夫れ絶對より之を言はゞ啻に人類ばかりか空華幻影なるのみならず宇宙萬象山河大地刹々塵々まで総に是れ空華幻影である是故に人と宇宙は同根同帯にして二もなく亦三もなく全く如々一如である宇宙自ら宇宙とは言はぬ万物自ら万物とは稱せぬ左すれば人自ら人と言ふべきでない宇宙は生れし始もなく又死すると云ふ事もない万物も亦生死去來はない山花開似錦、澗水湛如藍じや人も亦宇宙万物と同體なるが故に過去の過去際を盡し未來の未來際に亘つて生もなく死もなく不去不來である古歌に「涙華津に咲くや此花冬籠り

分別なしに咲くや此花」此花とは梅の事じや梅が咲くに今年は上等に咲いて人から賞められよふと云ふ分別はあるまい只無心に咲き無心に散るまでゞある人も亦斯の如く妄想分別を去り我執を除かば自他彼我を泯絶するが故に眼は見るばかり耳は聞くばかり鼻は嗅ぐばかりぞ何の執着する所かある何ぞ別に心と名くべき物やある「年毎に咲くや吉野の山櫻木を割りてみよ花のありかを」之に由て知れ心の不可得なることを外道は我を以て根本とするが故に境に執し物に着し而も心識を認得す我法は無我に安住するが故に心境一如、逍遥自在で一も着する所なし全く座二水月道場、修空華萬行までじや若し第二義門より之を言はゞ一切万物は勿論我等人類は因縁の所生な

るが故に因縁合すれば假りに形を現し因縁散ずれば本體に復歸するのである今の學説では万物は七十二原素で就中人類は七十二原素中の十四原素より成ると云ふ佛敎の小乘説に據れば万象も人も皆悉く四大より成立すると説く四大とは地水火風なり卽ち人の骨肉等は地大、血液は水大、體温は火大、呼吸は風大である故に骨肉の保存は地より生ずる米穀野菜を以てし、血液の維持に水分を取り、體温を持つに日光又は火を以てし、呼吸の持續に體外の風を出入させねばならぬ而も此四大は各々融通して居る人にして此四大が能く調和さるゝ時は生存する事を得れども若し調和を缺く時は病を得て遂に四大分離す之を世上名けて死と云ふ世に生存時を命と稱すイノチとは

息の内の畧語である息は意氣に通ず人は宇宙の大氣と意識によつて生存の理あり故に意氣熾なれば四大調和して生命を保つと雖も意氣衰ふれば四大自ら消耗し終に絶息するに至る醫聖ヒポカラテスは身體健康ならざれば精神健全ならずと云へり余は曰く精神健全ならざれば身體壯健ならずと壯健の時は氣力あり氣慨あり衝天の意氣あり活動的の人を活氣に富むと云ひ又は元氣の人と稱す常に小事に屈着せざる者を陽氣の人と呼び之に反するを陰氣の人と云ふ國に元氣なければ衰亡し世上人氣惡しければ沈滯す人にして氣魄なければ病氣となる世に病は氣より生ずると云ふが實に千古の格言である之を要するに宇宙は大氣の流動によつて消長變化するものなりされば宇

宙の大氣と進退を共にする者は自己即ち宇宙、宇宙即ち自己なるが故に病魔の入るべき餘地がない否病は畢竟空にして虚氣樓の如きもので本來あるべきものでない此あるべからざるものを實有なりと執着するから竟に病を構成するのである古今の名僧知識は此理に體達し常に宇宙と共に起臥するを以て病に罹りて死んだ者は殆んどない其死や天壽を終へ座脱立亡自在である不肖余は多年佛敎を參究し一切無自性なる事を徹見すると同時に難治難病を治療し得るの原理を發見したるを以て之を實地に試みしが成績甚だ良好にして名醫の匙を投じたる患者すら余の療法に由つて起死回春の功を奏せしもの枚擧に遑あらず之に由て今茲に病因及療法を公開し以て世の病に苦

める者を救はんとす

第二章

疾病の原因

輓近科學の進歩に伴ふて醫術大に啓け微を究め細を穿ち幾んど其堂奥に達せんとす偏に是れ文化の賜と云はねばならぬ此醫學進歩の力によつて世の患者は漸次減少すべき筈なるに事實は反比例の現象を呈し統計上世界各國共に患者の數を增加しつゝあるは何と奇怪の事ではないか畢竟今の醫學は病因を知らずして治療を施すが故に根本的の療法を爲す事が出來ぬ成程醫士も病因云々の語は吐けども开は病縁にして病因ではない彼等の說く所は形而下の事で更に形而上に

及ばぬ語を換へて之を言はゞ世の醫士は肉體を治療するに止まりて未だ心靈界に及ばず心身本來不二なれども假に本末を云へば心は本にして身は末なり其本を治せずして末のみを療せんと企つ是れ眞個に治療の功を擧げ得ざる所以である此心あれば此身あり此身あれば此心存す心を離れたる身なく身を離れたる心なし心身全く一如にして二ある事なし試に思へ心先づ行かんと欲すれば身之に伴ふて行き心に座せんと想へば身之に隨ふて座するではないか心と身は形と影の如く暫くも離れはせぬ心が樹の幹であれば身は枝葉である如何に枝葉を治療しても根本の幹を治せざれば眞の療法ではない由是觀之今の醫學は枝葉を逐ふものでは根本的治療に非ざる事が判明す

るであらふ醫士が肺患者に向つて汝は肺結核なりと診斷を下せば患者は忽ち落膽して半は死んで仕舞ふ是れ一心の作用によつて自ら身を死地に陷いるゝ現象にあらずや心に悅びある者は容顏微笑を帶び何となく愉快の相貌を現はすも心に悲みある人は容姿悽愴を呈し何となく悄然たる相好を顯はすは世人の毎に實見せる所であらふ夫れ斯の如く身は一心の妙用力によつて變化自在となるものなれば身の病を治せんと欲せば心より先づ療せねばならぬ然らば眞の病因は心にありと斷定するとを得べし併し深く根源に遡れば心本と無自性であるから心に病因てふものはない其ないものを惑の一念より誤つて自ら病なりと認め其憂鬱遂に凝つて疾病を構成し或は心火逆上して

熱を患ひ或は心水沈滯して寒を患ふ又は變じて胃腸肺肝の疾となり又は化して脊髓レウマチ脚氣となり更に千變万化し竟に四百四病に擴張さるゝのであるツマリ病は惑の一点を基因として万病を開發するものなれば惑の根本を滅除せざるべからず恰も樹幹を截斷すれば枝葉自ら枯るゝが如し疾病の原因茲にあり余が心身療法の發見基礎茲にあり語に云く土によつて倒るゝ者は土によつて起つと諸人宜しく之を思へ

第三章

病とは何ぞ

四大各々百一つ宛の病あるが故に遂に開いて四百四病となる雖然今

日の醫學では病數千二百と稱す尅實すれば煩腦無量なるが故に病も亦無量である而して其病とは如何なるものなりやと云へば地水火風の一身調節を失ふて心に苦痛を感ずるを病と稱するのである此病は天より來らず又地より出でず七十二の氣候にも病と稱すべきものはない盡天盡地何れの所にか病ある死せる骸骨は毫釐も苦痛を感ぜぬではないか左すれば病は人々の氣より生じ妄想妄念より起ると云はねばならぬ總て妄念多き者は多病である金に苦む者は金苦病に罹り煩悶し嬉慾に迷ふ者は色慾病となりて竟に身投げ情死の悲劇を演ずるに至る又名譽を貪る者は常に身心腦亂して須臾も休息するとは出來ぬ之を名けて貪名病と云ふ又利祿に飽く事を知らざる者は四六

時中孜々汲々として寢食をも忘るゝに至り遂には不義不正の財を積み一身を滅ぼす者も少くない之を財慾病と名く其他輕心、慢心、邪思、横念苟も心に苦腦を感ずるは皆悉く一種の病である病は單に頭痛、胃病、腹痛・肺病等の病氣ばかりを云ふではない彼の牛馬犬猫の如きは比較的人類より病が少ないナゼなれば彼等飛禽走獸は人間より妄想妄念が微薄であるから自然疾病も少ないのである彼等畜生が金に苦んだ事もなく名譽を望み利祿を貪りた事も聞かぬ年末になつて借金の爲め逃亡したる事もない實に安穩無事で心に苦痛が少ない、少ないから病に罹らぬと云ふ結論になる古今の聖賢君子名僧知識は名利の念がない所謂無慾澹泊であるから常に無病息災で而

も長壽を保つのである之に由て知れ妄念は疾病の製造元にして名利は生命を斷つの利劍なる事を是故に世人常に無病を希ひ長壽を望まば物に動着せず澹々として水の流るゝが如く漢來らは漢現し胡來らば胡現ずの境界に安住し物外に逍遙する底の覺悟なかるべからず明日晴天を望むも雨降らば何とする生を希ふて死すればドーするぞ只煩悶を增し苦痛を加ふるの外はあるまい左すれば晴天は晴天に任せ雨降らば雨何れの所より來る風何の色をか爲す生は生に任せ死は死に任すのだ茲に始て生死を離るゝ分あり刀を以て水を切るに水上更に刀痕を印せず鳥空中を飛ぶも毫も足跡を遺さぬではないか人若し我見我執を除かば即今此身此まゝ虛空と同化し居るが故に病もな

ければ生死もない見るに解脱し聞くに解脱し天地一枚の大解脱門何れの所にか疾病ある生死ある涅槃ある一切の賢聖は佛電の如しじや余に一句子あり諸人に告げん竹影拂階塵不動、月穿潭底水無痕

第四章

心機一轉

或人夏夜家に歸らんとす途中驟雨に遭ひ裸足にて急ぐ足蛙を踏み不快の念を懷きしまゝ歸宅せしが其夜の夢に多くの蛙襲ひ來り安眠する事を得ず全く蛙地獄に落ちた翌朝蛙の爲め懇に追善供養を爲し

蛙地獄の苦患を免れんと志し昨夜踏みし所に往き見れば何ぞ圖らん蛙にあらで茄子なりし茲に於て心機一轉したれば其夜より蛙も來らず安眠する事が出來たとの面白き話がある畢竟之れは始め踏みし時心に蛙とのみ想ひ込んだから其心念凝結して蛙地獄を自ら製造したのである後に茄子なりと知得した時心機一轉と同時に苦痛轉じて安樂を得たるなり人の病氣も亦復是の如きもので假りに一旦病に罹ると病に執着し自己は病氣なり病人なりと增々深く浸染し繫着縛着するが故に病なきに自ら病を建立し遂に不治の病人となるのである昔し人あり客となりて酒席に列し盃中に蛇の幻影を認め心ならずも之を呑む夫より病となり百藥手を盡せども治せず自他共に必死と爲す

曩に招きし主公之を傳聞し氣の毒に堪へず依て再び其病人を招き强て酒を侑めたるに以前の蛇復盃中に現ず病者大に驚く主公上を指す仰視すれば鴨居に弓の懸けたるあり其弓影盃中に映じたる狀宛ら蛇の如くなりし茲に於て病者頓に悟り曩に蛇を呑みしと想ひしは全く此弓影なりしかと心機一轉したるが爲め即座に全快したりと云ふ心機一轉の力豈に廣大のものならずや余在米の砌明治三十九年會々桑港にあり同年四月有名なる震災に逢着した當時の慘狀は新聞記事以上の猛烈であつた其際公立病院には多くの入院患者もあり中には重患にして單身起つ能はざる者も段々あつたが地震と同時に其重患者が自分に起つて病院を出で避難地に赴き其まゝ全快したるを

目擊した事がある之れも心機一轉の賜に外ならぬ其他火事と聞きて足の立たぬ者が遽に飛出した例も少くない是等はツマリ一時危急の爲め自己の病氣を忘却したのだ病人は常に病を念頭に置き全身を病の渦中に投込んで居るから造次にも病を想ひ顚沛にも病を忘れぬ、忘れぬから病と同化し轉々して病魔の窟中を出る事が出來ぬ其狀宛も鳥の籠中に在るが如し若し其れ心機一轉し自己、自己の病を忘却し來らば清風明月自己の本源に復歸するを以て病魔忽焉として退散せむ要は唯心機一轉するにあり何をか心機一轉と云ふや曰く病を忘れ自己を忘れ宇宙乾坤と同化するを云ふ咦、

第五章

摩觸療法の由來

余幼年にして父母を喪ひ幾多の辛酸を嘗め遂に十六才の時志を立てゝ海外に航し全世界を三週し後北米合衆國に奄留する事となり便宜上米國歸化權を得て諸種の事業に從ひしが其間或は成功し或は蹉跌し波瀾曲折尋常一樣の事にあらず在外三十八年間の歷史を顧みれば時に或はロンドンの月を賞し或は巴里の花を詠めペルリンの酒に醉ひスイツルの景に憧がれ又はローマの古趾を尋ねポンペーの舊跡を探り又は地中海に泛んでセントヘレナ島に遊び世界の三傑ナポレオンの靈を吊ひ希臘に往きてはアゼンの盛時を偲び其他モスコーの雪に會してはナポレオン敗軍の故事を思ひセイロンに寄港しては釋

尊說法の金剛座を拜したりき特に北米合衆國に至つては最も久しく在留せしが故に四十八州幾んと足跡の印せざる所なし今現にワシントン州に於ては余が男兒四人殘留して余が業を繼續し相當の成功を告げつゝあるのである由來余は壯健で奮鬪的の人なり故に是と思ひ込んだる事は成敗利鈍を問はず猪突を試みた明治三十五年頃或る事業の爲め煩悶に陷り之を拂はんと欲しキリスト敎會にも出入したが胸中の悶々は去らなかつた之が爲め滿三年間妄想百出、笠上更に笠を案し底止する所を知らず暗より暗に入り幾度か悲歎の涙に咽んだのである然るに時なる哉佛祖未だ吾を捨て給はざるにや同三十八年鎌倉圓覺寺の管長釋宗演禪師化を米土に垂れ玉ひ加州各地に法輪

を轉じ内外人の渇仰一方ならざりし余師の來化を聞き暗夜に光を得し心地して直に師の幻寫を訪ひ平素の煩悶を陳べ且つ之か拂拭の法を問ふ師爲に不思善不思惡の公案を授與せらる余密に山間に入り死を決し寢食を忘れ功夫三昧に入ると正に三週間一夜風聲の樹林を撼かす音を聞き忽然として自己本分の田地に撞着す飜て己身の所在を覓むに總に不可得なり是れ迷なりや是れ悟なりや更に知る所なし然れども從來の悶々は晴天に一片の雲なきが如く胸中分外に清涼に分外に安穩なりき之を語らんと欲するに口啞の如く言ふ所を知らず茲に於て山を出で走つて師を訪ひ点撿を乞ふ師拶する事數十回大に嘉賞せられ竟に安名、眞哉居士と賜ふ次で師の後に來錫せられしは

宗活禪師であつた余復師に參禪し朝參暮請、嗔拳熱喝を喫すると數を知らず山上更に山あるとを知ると同時に此法は盡未來際の修行なるを覺り米土は法益を得ると能はざるに由り事業を豚兒等に與へ身は飄然三十八年目にて歸朝せしは過る明治四十四年の秋であつた爾來藝州佛通本山に登り觀白老師に參じ或は紫野大德寺に至り宗般禪師に就き其他佛道管長圓山雪庭師、荻野拙叟老漢及乃木將軍の師たる南天棒老大師等の諸師を叩き參禪辨道に懈らざりしが或時御許山佛通寺に於て猛虎巖上に打座し自他不隔毫端の一句子を徹見すると同時に一切衆生の病魔を驅除するの法を發明せり後來之を諸人に試るに百發百中一も誤らず中にも醫士の以て難治とせる近視眼

の如き脚氣の如き又はレウマチ、ソコヒの如きは奏功確實にして驚くべきものあり之に由て此法を永く胸底に秘するに忍びず之に摩觸療法の名を附し世界万衆の爲め茲に公開する事としたのである之を摩觸療法の由來とす

第六章

一喝と對治法

病を對治するに世間種々の方法行はれ或は藥石を以てするあり或は鍼灸を以てするあり又は催眠術又は禁厭呪術其他摩擦法、電氣療法、神佛祈禱等數多くして各々應分の効力あるには相違なかるべし

余は是等の方法を悉く否定するものでは、い人々信ずる所に向つて治療を乞はゞ一時的又は一局部の快癒は必ずしも得るゝであらふ而して余の發明に繫はる對治療法の第一着手は喝の應用にあるのだ抑も喝に四喝あり或時の一喝は金剛王の寶劍の如く或時の一喝は踞地金毛の獅子の如く或時の一喝は探竿影像の如く或時の一喝は一喝の用を作さず之を臨濟大師の四喝と云ふ往時織田信長安土城に佛敎徒と切支丹とを對向させ其宗門の優劣を鬪はした佛徒よりは八宗の龍象參會し切支丹宗よりはウルガンバテレンとアッコンの両人出席したり中にもアッコンはオランダ人にして長崎にあると十五年間而も一切經を三回讀破したる英傑である當時信長は切支丹宗の信者に

して京都に南蠻寺まで建立した位であるからウルガン、アッコンは信長を笠に着て意氣得々其勢ひ凄しかりし麼くて當日は公衆の傍聽を許されたから來會者万を以て算へられた南禪寺の長老劈頭第一に進み對論を挑むアッコン開口一番問ふて曰く如何なるか是れ佛、長老答て曰く即心即佛アッコン曰く如何なるか是れ即心即佛長老曰く即心即佛アッコン劍を拔て長老の胸に擬す長老即ち喝すアッコン絶倒す此討論忽ち佛徒の勝利に歸せり蓋し長老の一喝は金剛王の寶劍であつた以て一喝の威力廣大無邊なる一斑を知るがよい元來得法の士が一喝を吐く時は蓋天蓋地にして持ち來るが故に前に釋迦なく後に彌勒なく天を殺し地を殺し山河大地森羅万象を殺倒し盡すを以て

病魔も潜むに所なし左れば余が法に由つて病を對治するには先づ患者に對し直立を命じ閉目させ第一金剛王の一喝を吐くと即座に前後切斷し病てふ觀念妄想は立所に拂却せらるゝのである此當體が前に云ふ心機一轉の場合なり而して前後切斷、心機一轉後如何なる方法に據つて治療を施すかは次章に詳しく述ふるであらふ

第七章

血液と摩觸療法

人の生命を保つに必要缺くべからざる物は血液である此血液は一人につき二升四五合しかない而も四分の二は腹で四分の一は腦と皮膚に四分の一は節肉と内臓を養ふ事になつてある併し腹の中には兎角

溜りやすいで他の部分が乏しくなり其結果充血の部分や貧血の所が出來て遂に病氣となるのである元來血液の輸送本部は心臟で十文字に仕切られてある右上は右心耳で左上は左心耳である右下を右心室と稱し左下を左心室と云ふ一分間に七十二回の脈搏がありて一脈毎に一合半の血を左心室から溢出し之れが循つて身躰各部に養分を送り又老廢物を輸ぶ役目をする鮮紅な血が暗紅になり營養に適しなくなると肺を通過し又新になり左心耳に入つて左心室に歸る三十秒で全身を循環する若し此調節が少しでも缺損すると直に病氣となる是故に血液の循環は常に過不及なきよふ調節を計らねばならぬ左れば胸と腹との間にある横隔膜は腹に力が入ると下に壓し下り腹の溜血

が押出されて十分に循環作用を起すから一身の健康を保つ事が出來る然らば如何がして腹に力を入れ腹の溜血を押出すかと云ふ説明は第十章氣海丹田の所で充分辨じてあるから該章を一讀して貰ひたい元來人體の血液は堀川に水の流るゝ如きもので頭部より足部に至るまで凝滯なく流動せねばならぬ若し頭部に滯つて循環せざる時は腦溢血となり卒中となる又足部に血を輸送する事出來ざる場合はレウマチともなり脚氣ともなる今日の醫學上ではレウマチ脚氣の如きは他に原因ありと云ふかなれどもッヤリ足部に血液の循環さへ充分であれば足部一切の病は起らぬのである總て醫士の説く病因てふものは病緣であつて根本的病因ではない唯根本は一心の迷妄、惑より生

じ之が血液不循環の誘因を爲すのである血液の變化は實に驚くべきものがある論より証據、物に驚愕したる人の顔を見よ忍ち顔色蒼白を呈するに非ずや又青年男女が羞かしき事を聞かば直に顔面紅色を顯はすではないか斯く一瞬時に青くなり紅くなる所を看ても如何に血液の變化汎速なる事が知れるであらふ人若し心を動かさゞれば身も亦安泰なるが故に血液の循環平均し無病息災たる事が出來るのである左れば余が療法に於ては第一、一喝を吐いて患者の膽を奪ひ前後を切斷し患者に心機一轉を爲さしむると同時に患者に妄想邪念を起すの猶豫を與へず病に應じて直に强度の全身摩擦又は局部の摩觸を行ふ斯くする時は全身の血液活動を始め頭部より足部に至るま

で循環流通を爲すを以て輕きは一回の施術拭ふが如く効を奏するあり重きも二回三回乃至七八回にて全治の効果を見るもあり余が發明以來諸万人に對し施術せし經驗によればドーしても病者は血液の循環をつくるが肝要である而して此血液の循環を一層敏活ならしむるには一斗の微温湯に芥子一合の割合にて能く之を溶解し局部又は全身を入れ漸次湯を適宜に熱くし身を温むると全身の血管膨脹し血液よく循環するから余が施術の効力を増々光輝あらしむ之れも余が數次經驗せし結果なれば決して疑念を挿むべからず上來説く所の摩觸法は頃時始めて行ふにあらず我が佛敎寺院の入口には能く賓頭盧尊者の像が安置され病者は來つて此尊者を摩でゝ病の平癒を祈る故に

世俗之をナデホトケと稱す傳へ聞く釋尊入滅後此尊者涅槃に入らずして病者を見れば摩擦を爲し血の循環を圖り衆生の苦腦を救濟せしと以て此法の由來する所久しきを看るべし

第八章

信仰心と療法の關係

余が身心療法は宗教を根底とし宗教の上より治療を試むるのである而して宗教の第一義は信仰心にある信仰がなければ佛教も耶蘇教も其他一切の宗教は根本的に破壞され決して成立するものでない龍樹祖師曰く佛法の大海は信を以て能入と爲すと古來藥師如來に祈願して難病を治したり子安の觀音に祈誓して安產を爲したりする事實は

枚擧に遑あらず四國八十八箇所を巡拜して諸種の病を癒し身延山に詣でゝ多年の難症を治せる抔は今現に行はれつゝあり祐天上人や桂川力藏が成田不動尊の加被力に依つて自己の宿願を遂げたるが如きも畢竟信仰心の厚き賜にあらずや斯く言はゞ今日の學者は之を迷信なりと排斥するであらふが信仰した者でなければ信仰の價値は解らぬ信仰は水を飲んで冷暖自知するが如きものである信仰は磁石の鐵を吸ふよふなもので宇宙万象を引寄せる力がある今時の學者は多く精神が散漫して居るで信仰力がない唯妄想分別を逞ふするに過ぎぬ妄想は第六意識の分際に属す意識は惡知惡見の魔窟である問屋である到底諸法の眞相を看破する事は出來ぬ若し其れ宇宙の眞相を達觀

せんと欲せば第六意識は勿論第七摩那第八阿賴耶識まで打破し來らねば宇宙と同化する事を得ず、物と我と同化して微塵も留めざる所を眞の信仰と云ふ信仰には一点の疑ひもなく半点の濁りもない恰も水の清澄たるに似たり是故に天上の明月は招かざるに自ら映ずるのである子は親を信じ臣は君を信じ民は國を信ずる若し信ぜざるに於ては親を虐げ君を輕んじ國を滅すに至る豈に思はざるべけんや古人云く信力堅固家、災禍雲不起と信仰の功德も亦廣大ならずや信仰は物を能く感應道交す此感應道交は信仰の結果である試に看よ玉を以て日に向へば火を感じ月に對すれば水を感ずるではないか梅干を見て口中酸氣を生ずるも感應道交の一証なりされば余の施術を受けん

と欲する者は必ず全治するに相違なしと確信して來らねばならぬ此確信即ち信仰があれば余が心と感應道交するか故に丁度両鏡相對して中に影像なきが如く自他彼我を泯亡し双絶す於是乎病痾自然に消滅するのである昔は病者キリストに接して疾癒ゆキリスト曰く爾の信既に爾を癒やせりと然れば自己の病は自己の信力によつて全快するものなり本來より云へば人は身心共に無自性の故に疾病なきが本質である當然である病あるは恰も鏡上の塵の如し塵を拂拭すれば玲瓏曇りなき本の鏡に復歸する迄じや左れば余の療法は諸人の病を治するに非ずして諸人に自覺を與へ本體の健全に還らしむるにあり若し余が療法にして實効を奏せざる者あらば开は臨濟大師の所謂汝の

信不及の爲なりと云ふの外なし盲者の見ざるは日月の咎にあらず余豈敢て關せんや

第九章

暗示法の妙諦

近年暗示てふ語が世間に流行し殊に催眠術に於て多く用ゐらるゝ樣である蓋し暗示の主旨は術者が被術者に對つて命令的に種々なる訓誨を與ふるのである而して被術者が一旦術者を信じたる場合は其命令訓誨を遵奉し違背せぬから暗示の効を奏するのだ併し暗示の大本は佛敎より出たもので始め釋尊が一切衆生悉有佛性と宣言したは印度に於ける刹利種、婆羅門、毘舍、栴多羅等の階級制度を打破し其

弊風を改革して一切衆生の向上發展すべきを暗示したのである啻に一切衆生のみならず草木國土悉皆成拂とも暗示して居る何と廣大なる暗示法ではないか之れを催眠術や世間普通の暗示に較ぶれば天地雲泥馬の足と蚊の足の相違がある大般若經第三百二卷に舍利子甚深の般若波羅密多は我れ滅度し終つて後時後分の後五百歲に東北方に於て當に弘く流布すべしとあるは佛敎が印度より支那日本に弘通すべきを暗示したのである印度より日本を見れば東北方に當つて居るのだ法華經の授記品に釋尊が會座の大衆に對つて汝等當來皆應に成佛すべしと宣傳せられしは特筆すべき大暗示である般若多羅尊者が菩提達摩に向つて汝の佛法は震旦にあるべし今より二十年の後彼地

に渡つて大法を傳ふべしと暗示したが達摩は二十年を待たず十年にして支那に來たが梁の武帝と法縁契はず去つて少林山に隱れ九年を經て神光に逢ひ釋尊傳來の衣鉢を傳へたで矢張り般若多羅尊者の暗示の如く傳法迄に二十年を要した我朝にては大應國師が大燈國師に傳法したる時の印可狀に汝二十年間聖胎長養すべしと暗示されたで爾來身を晦まし乞食の群に入り京都五條橋下に呻吟し大に法財を蓄へられたが果せる哉二十年の後、後醍醐天皇の召に應じ紫野大德寺の開基となり大法輪を轉じた総て歴代佛々祖々の一言一行は三千年の昔から悉く暗示である我法では暗示と言はずして暗合密令と稱す然れば世上の暗示と唱ふるものは佛敎の借用物に過ぎぬ併し貸主

がないで泥棒物と云はねばならぬ念佛門で聞其名號信心歡喜とある

は彌陀他力の暗示を其まゝ聽き受けたる時彼此三業不相捨離の當體に暗合し機法一躰の眞境界を得たる場合を云ふたのである世間の親が子に對ひ汝成長して中學大學を卒業し國家有爲の人物となり以て家名を揚ぐべしと暗示するが故に親の一言心肝に徹し常に腦裏を離れぬから遂に初一念を貫徹し目的を達するのである乍去親の暗示方强弱如何に由つて子の徹し方に淺深がある斯く辨明し來らば社會何れの所にも暗示は行はれつゝあるで決して不思議ではない余が療法に於ても暗示を與へるが之れは佛祖の暗合密令より脫化し來り超凡的で而も患者と術者間に牆壁を除きたる融合的のものである之

を要するに術者は患者に對し八識打破の境界より施術せざるべからず暗示を與ふる時は必ず斷定的でなければならぬ即ち患者に一喝を以て心機一轉なさしめ次に血液循環法を行ひ而して後汝の病は已に癒へたり齒痛はよくなつた足痛は去つた腦の充血は消散したと其病に應じ療法を終ると同時に暗示を與ふれば一切唯心所造の故に其暗示長く患者の腦裏に印し信力が一層堅固となるから疾病逆轉の憂ひがない若し汝の病は治するならん兩三日の後には全快するであらふと不斷定的語句を用ゆれば患者に不安と疑念を起さしむるから其効力至つて薄弱である往時織田信長が今川義元を桶狹間に攻むるに當り味方は少數敵は大軍の故に味方の士氣阻喪せん事を恐れ出陳の

際全軍を率ゐて熱田神社に詣で戰勝の祈願をしたるに神鳩社殿より飛出した斯は信長が豫め宮司に命じ斯く爲さしめたるなり全軍此奇瑞を見て勝利疑ひなしと踊躍歡喜したるに由り士氣大に奮ひ遂に空前の大勝利を博したる事あり是れ信長の暗示が旗下全軍に及んだのである是等の實例は古今に亘つて數限りなし左れば暗示は成るべく斷定的にやらねばならぬ斯くすれば患者は術者の命令を充分腦裏に刻し且つ悅服するから奏効を一層確實ならしむるものなり

第十章

氣海丹田

臍下三寸の所を氣海丹田と稱す此所は身體の中心点にして氣力の聚

まる所なり言はゞ五尺の身體中大政府とも云ふべき一番肝要の所で
ある常に氣をして此氣海丹田に充たしめば氣力全身に遍くが故に
病の侵入すべき餘地がないで無病息災長壽を保つ事が出來る而して
丹田に氣を充たしむるには先づ身體を安座し脊梁骨を樹立し宛も石
塔を建たるが如く眞直にし前後左右に偏らず緩く衣帶を着け下腹に
力を入れ眼を半開にし口は開かず閉ぢず鼻より息を細く長く入れて
丹田に納め其惡氣を徐々に鼻より放出する此間一点の妄想邪念を起
さず無心にして出る息を自然に任せて一つ二つと十まで算へ又一よ
り反覆して十まで數へ三十四十乃至百二百と算ふれば妄想妄念自ら
消盡し心虛空の如くなりて遂には身心打失し身の存在さへ認めざ

るに至る之を大死一番底の境界と云ふ此境界に至れば一切の病氣は
なくなるのである此大死底より蘇生し來れば天地と我と同根、万物
と我と一體の大歡喜を得るのであるが併し此境界に達するは中々容
易の事にあらず故に普通人は唯行住座臥下腹に力を入れ氣を緩ふせ
ぬよふ常に氣を張つて居ればよい元來氣海丹田は一國で云へば中央
政府に當る政府が一國の中心にないと四方に號令が行屆かぬ支那政
府は北京にあるが北京は滿蒙の方に片寄つて居る支那四百餘州の中
心でないッコで革命騒動はイッでも南京方面より起るのだ人の身體
でも狂人は氣が頭に昇つて居るから足が蹌々して居る又氣が足部に
滯つて居ると腦髓がボンヤリして仕舞ふ是故にドーしても氣は下腹

に納めて置かねばならぬ総て臍より上は陽を司どる故に上部は熱し易く臍より下は陰を司どる故に下部は冷へ易しされば上部は成るべく冷かならん事を要し下部は成るべく煖かならん事を期す然かすれば身體の冷煖平均して一方に偏らざるにより血液の循環其當を得て無病安全なり下腹たる氣海丹田に力を入れ氣を充實すれば其氣力能く腹の溜血を上部と下部に押出すから靜動二脈に滯りがない、滯りがなければ病氣はない、病氣は血液の不循環を緣として起るものである血液不循環なれば元氣がなくなる古人曰く凡そ万形の中にあつて保つ所の者は元氣より先なるはなしと孟子は我れ善く吾が浩然の氣を養ふと云へり此氣を養ふと云ふのが即ち氣海丹田に氣を貯ふる事

である朱子曰く病氣中は宜しく思慮すべからず凡て百を暫らく一切放下し專ら心を存し氣を養ふを以て務と爲すべしと斯く古賢は人體上氣と云ふ事に重きを置て居る世俗心の恁長なる者を氣の長き人と云ひ性急の者を氣短かな人と呼び漫りに怒る者を短氣の人と稱す又心の狂へる人を氣違ひと名け度胸ある人を膽氣に富むと云ふ其他勇氣、豪氣、意氣、英氣、義氣、等皆是れ氣海丹田の消長息を如何に關せざるものはない彼の老莊、抱朴子、益軒、牛山、の如きも養氣の事に就て大に論じて居る然れば人にして夭折せず長命を保ち而も無病を期せんとならば常に氣海丹田に氣を蓄へて以て五尺の身體を支配せざるべからず

第十一章

一切唯心造

唯心所造は佛語であるが宇宙乾坤総ての事が唯心の所造に非ざるものはない經に心は巧畫師の如しともあり能く万般の事を寫し出す試に此世界は何者が造りしぞと云はゞ耶蘇教ではヱホワの神が六日間で拵へ終り七日目に休息したから七日目を日曜日と名けて休むのだと云ふが其神も人が居らねば存在を認むる事は出來ぬッまり神は人の反影に過ぎぬ世人能く安眠し見よ安眠したる時は天地もなくなり万象も消滅し自己の身體まで皆消へて仕舞ふではないか曉鐘一打目を覺ますと忍ち五尺の體が生じ家が生じ天地万物が一時に出現

する夜に入れば復世界は滅却して一微塵も留めぬ朝になれば復世界が出來るソーしてみれば宇宙万象を拵へたり無くしたりする者はエホワの神に非ずして吾人の心と云はねばならぬ昔は天動説を唱へて日月星辰が廻ると云ひしが今は地動説行はれ日月が動くに非ず我等の住居する地球が廻轉するのであると云ふさすれば人の心が既に天地を一轉させて居るのじや心の作用一つで金殿樓閣も出來れば監獄も出來る古へ支那に一僧あり修行の爲め行脚に出づ一夜原野に露宿す中宵渴を覺ふ四方を探し水を得たり其味甘露の如し翌朝再び其水を飲まんとすれば何ぞ料らん髑髏の溜水なりし之を見て將に嘔吐せんとす茲に於て心機一轉し染淨不二、一切唯心造なりと大悟せ

りと云ふ清淨と見るも心から不淨と認るも心の作用である心の本躰には淨不淨の差別はない曾て文珠菩薩佛勅を奉じて維摩の病を訪ふ文珠問ふて曰く一切善不善の法何れより來ると維摩答へて曰く身心より來ると之に由て知るべし一切の諸法は一心を離れざる事を此道理より考へたなら病氣も心より生ずる事が知れるであらふ我心より病を造りて自ら苦むは恰も蚕が自分の口より絲を出して自ら縛する如し吃音でも自分で吾は吃音なりと確信し其觀念が深く腦裏に刻まれて居るから增々ドモリとなつて發音の自由を缺くのである又肺患者が醫士より肺病の斷定を下されると心に肺と云ふ念が染着して離れず外部の人々も彼人は肺病なり近くべからずとて嫌惡ものから自

分と他人が寄集つて遂に肺病にして仕舞ふのである衆口金を爍すとは此事であらふ何と憐れな人間共ではないか人が何と云ふても自己が虛心坦懷で病に氣を止めず平氣で居れば全身に氣が滿ちて居るから常に健康體を保つ事が出來る斯く詮じ來れば心は一切萬法の製造元である併し本來を言へば心と名くべきものもない心は有に非ず無に非ず非有にあらず非無にあらず內に非ず外に非ず中間に非ず古來今にあらず實に言語道斷なり唯强ひて名けて心と稱するのみ此心青山と現じ白雲と現ず或は日月と成り大海となり神となり佛となる森羅万象刹々塵々總に是れ心の當相である此心眼にあつては見ると云ひ耳にあつては聞くと稱し鼻にあつては嗅ぐと名け口にあつては談

論し手にあつては執捉し足にあつては運奔す此心伸るときんば法界に溺淪し縮むるときんば絲髪も立せず嗚呼心なる哉心は三世十方を包容して漏す所なし此絶對無邊の心を彌陀と稱し觀音と呼び大日如來と云ひ又は本來の面目と名け本地風光とは云ふなり一代藏經も全く心の注釋に過ぎぬ大般若經六百卷も心の一つより流露したのである此無自性なる絶對心を徹見しなば疾んで病まざる底の境界を了得するが故に三世十方を貫通し無病息災不老不死の人たるに至らむ何ぞ大隈伯の百二十五歳のみに止まらんや伯も亦一心界の所現に外ならざるなり

第十二章

結論

上來章を重ねて我が身心療法の何物たるかを辨明したるが之を要するに此法は宗教即ち佛教を基礎として起りしものなれば患者も亦佛教の上に立ち信仰を以て治療を受けねばならぬ又何人が此法の旨を會得し術者の任に當るも施術の際は一切の妄念を去り虚心ならざるべからず若し一点の思念を挿まば患者と感應道交せざるが故に病遂に癒へず却て人の嗤笑を招かん施術は須らく術者と患者が函蓋相應能所不二なるべし而して一喝は盡天盡地無心の一喝なるを要し次に血液循環法は一呼吸の中に摩擦を行ふべし是れ患者に思念妄想の餘地を與へざるが爲なり若し治療中患者に思念の餘地を與ふれば血液

循環を鈍からしむるにより往々効を奏せざるは余の實驗せる所なり

次に暗示法即ち暗號密令は必ず嚴格に且つ圖定的なるを忘るべからず以上は本療法の必要條件なるが此外に術者たるもの丶注意を要すべきは施術前患者に對し第八章の信仰心と療法の關係を能く説明し置かねばならぬ何となれば荒廢の田地には直に種子を蒔くも効果なきが如し種を蒔く前には必ず耘り耕すは當然ならずや患者此療法を受けて奏効せざる者あるは信力の足らざるに基因する事を覺悟せねばならぬ乍去術者不熟練なる時は効果薄きことあり小僧は初より長老たるを得ざる事を思はゞ多少練磨も爲さゞるべからず藥餌を與へて治療するは世上一般に知る所なれば人以て怪まず故に信力あり

と雖も余の發明せるは精神即ち心の方面より肉體に及ぼして治療するものなれば人多く知らず茲を以て肉體と精神の關係、信仰と本療法の干繫等を充分患者に説明する事を解るべからず斯く術者と患者相一致し以て成功するが心身療法の特色なり余本書に著語せんとす諸人聞かんと要すや

咭嘹摩觸擬會則差

佛教摩觸療法　尾

大正四年八月六日印刷
大正四年八月十日出版
原籍　石川縣石川郡野々市村三十七番地
當時　仝縣金澤市上胡桃町二二の二寄留
著者兼發行者　巽　榮　次　郎
大阪府三島郡茨木町五百九拾番屋敷
印刷者　岡　崎　政　次　郎
大阪府三島郡茨木町五百九拾番屋敷
印刷所　合名會社　周山堂印刷所

1009

終